

# 「マカーマート」の説教のテーマ —ワアズ・ワスィーヤ・シウル

Homily in the *Maqāmāt* — *wa'z, waṣīyya, shi'r*

岡崎 桂二  
Keiji OKAZAKI

ジンと人間の輩よ、お前たちから使徒たちが遣わされて、わしのしるしを語り聞かせ (*qaṣaṣ*)、おまえたちが今日の日を迎えることを警告していた (*wa'aḏa*) ではないか。  
(コーラン、6章87節)

キーワード：マカーマート、説教、遺訓、イブン・アル=ジャウジー、影響の不安

## 1. イスラーム世界の説教 (師)

12世紀初頭、君主より飲酒を強要され、懺悔のためにマッカ巡礼に旅立ったイブン・ジュバイル (1217年没) は、アンダルスからマグリブを経てマッカに至り、さらにバグダード、ダマスカス、シチリアに亘る道中の詳細を記する『巡礼記 (*Rihla*)』を残している。彼はバグダードで当代一の説教師とされるイブン・アル=ジャウジー (1201年没) の説教の講筵 (*majlis al-wa'z*) に2週間の間に3度列なつた。この説教師はハンバル派のウラマーとして名声を博し、歴史家としても令名が高い。その著作は300編に上ると言われている [Hartmann-1986, 52-57; Jones, 17; Swartz-1999, 38-39]。彼は説教に関する理論書、指南書である自作の『カーッスとムザッキリーンの書』の中で、自己の説教を聞いて前髪 (*ṭā'ila*) を切り落とした若者 (*ṣubḡān*) は1万人、改宗した者は10万人、と豪語する [Ibn al-Jawzī, 195; Swartz-1971, 231]。

(われわれは) 金曜日のアスルの礼拝の後で、ニザーミーヤ学院のこの講演に列席した。そして彼がミンバルに上がると、備え付けの椅子に腰かけたコーラン読誦者が人々を誘い、心をかきたてるように聖句を唱え始める。彼らは見事な抑揚をつけ、時に物悲しく、時に楽しげな調子で読誦する。ついで前述のシャイフであるイマームが静かに、そして重々しく説教を始める。彼はその中で、至高至大なる神の聖典の註解や神の使徒——神よ、彼に祝福と平安を垂れたまえ——の伝承の解説や、その意味の説明を知識を駆使して行った。次いで四方から嵐のように質問が浴びせられるが、よどみなく答え、詰まることなく処理していく。そして質問書が手渡されるが、彼はそれらを手にまとめて持ち、最後一枚まで次々に答えていった。説教中に神の御利益と 臨在について語り始めると、敬虔な者は涙

を禁じ得なかった。特に講演が終わりに近づくと、説教がはいって人々に悔悟の念を起こさせ、涙を湧き出させた。悔い改めた人々は争って彼の手の中に倒れ込んだ。いったい彼は何人の前髪を切り落とし<sup>1</sup>…。[藤本・池田監訳、297～298；家島（第2巻）、311-313]

イブン・ジュバイルは木曜日の早朝にカリフ宮殿の広場で行われたイブン・アル＝ジャウジーの講演を再度聞きに行った。演説者は冒頭に、「恋にのめりこむ姿／あたかもアーキル山の斜面にて、雷に打たれし者の如し」、で始まるカリフへの賞賛詩を朗唱した。コーラン読誦に続き説教が始まると、「人々は目に涙を浮かべ、心に秘めた願いを漏らし、罪を認め、改悛の情を示しながら、彼に身を投げ出した。人々の心は奪われ、魂は骨抜きとなり、恐怖と驚嘆が入り交じり、大変な騒ぎとなり…。演説の最中に、胸躍らせ、心を溶かす官能的な恋の序詩（ナスィーブ）を詠んだが、それは人々に熱情の火をともしながら、やがて恋の部分は禁欲的（*zuhd*）なものに変わっていった…。」

恋の火に溶けた我が心はいづこに／いづこにありや／醒めやらぬ我が思い  
彼らを思い、我が思いを募らせ、サアドよ／神かけて、伝えよ、サアドよ  
既に癒えしか、汝が心、サアドよ  
[藤本・池田監訳、302～304]

この2つの引用文は参列者の熱狂ぶりを余すところなく伝え、イスラーム世界における説教の諸相を十全に描いている。説教者はミンバルに登壇して説教すること<sup>2</sup>、最初にコーランが読誦されること、説教内容はコーランとハディースの説明、解釈である点、説教後、聴衆は口頭と書面で様々な質問を行う点、冒頭あるいは終末に為政者（カリフ）への賞讃詩が唱えられること、恋愛詩（ナスィーブ、ガザル）を援用して聴衆を熱狂させ、悔悟に誘い、啼泣させること、一層感動した人々は前髪を切り落として改悛の情を示すこと、等々。この講演は説教に対する参列者の熱狂振りが特に目を引くが、人々が講演者に差し出す質問状の記述は、説教の場に列なる信者達が宗教的知識獲得をいかに熱望しているかを示すのみならず、既にイスラーム世界で紙の使用が一般化していたことを示す社会史的資料としても貴重である<sup>3</sup>。

現代に至るまでイスラーム信仰において説教は重要な位置を占める。特に宗教的知識に欠ける一般大衆（アーツマ *‘amma*）にとって、説教の場は唯一と言ってよい程の宗教的知識修得の機会である。この事実を引用文中の聴衆からの質問の多さが示している。

現代においても説教の重要性は変わらない<sup>4</sup>。「アラブの春」と称されるチュニジアに始まりエジプトに波及した、独裁者打倒を主張し、その声を上げさせ、人々を導いたのは金曜礼拝（*ṣalāt al-jum‘a*）時の説教（*khuṭba*, pl. *khuṭab*）を通してであった[Jones, 2; 八木、239～242]。

イスラーム世界で説教を表す主な語にはフトゥバ（*khuṭba*）、ワアズ（*wa‘iz*）、タズキール（*tadhkīr*）、カサス（*qaṣaṣ*）、があり、説教の特殊例としてのワスィーヤ（*waṣīyya*、遺言、遺訓）がある[Jones, 19]。これらの語の意味内容は時代、地域、状況によって大きく異なるが、大まかに一般化すれば[Jones, 15-19; Swartz-1999, 41-45]、フトゥバは「話す、語る、説く」を原意とする語根 *kh-ṭ-b* からの派生語であり、一般的に「話し、会話」を意味する。そして限定的な

意味として「説教」を表し、特に金曜礼拝時の説教を示し、当該時の説教師としてハティープ（khaṭīb）の語が用いられる。ハティープはその制度成立の正統カリフ時代から、ムハンマドに倣う説教者とされ、為政者から任命を受け、一定の形式と手順に従っていた[Swartz-1983, 227-229]。なお説教一般、あるいは金曜礼拝時の説教を表すフトゥバの語は、説教における導入部分を指す場合があり、注意が必要である<sup>5</sup>[Jones, 15; Swartz-1999, 41]。

ワアズは「勧告、忠告、説諭」を含意する語根 w-ʿ-z からの派生名詞であり、能動分詞であるワーイズ（wāʿiz）は忠告（者）や勧告（者）を表し、限定的な意味として説教師を示す。

タズキールは「記憶する、述べる」を原意とする語根 dh-k-r の第2形の行為分詞であり、「思い出させる（者）」の意味を有する。そしてワアズが神への畏れ、火獄への懼れへの警告を意味するのに対して、タズキールは神への感謝を心に留め、想起させる行為と見なされている [Pedersen-1948, 227-228; Hartmann-1987, 79; Jones, 16-17]。

カサスは「話す、（物語）を語る」を意味する語根 q-ṣ-ṣ からの派生名詞であり、qiṣṣa は話、物語を示す。そして qāṣṣ は「物語師」を表し、話の内容によっては説教師と見なされる。説教師の中で最も非難を浴びているのがこのカーッスである。話の中にイスラエーリヤートと称する、ダビデやヨセフ物語を中心とするユダヤ世界の物語を挿入したり、信憑性の薄いハディースや、学問的裏付けのないコーラン解釈をするためである [Ibn al-Jawzī, 66-67; Swartz-1971, 97; Armstrong, 90-97, 221-230; Pedersen-1953, 221, 225; Goldziher, II, 153-156]。

そしてワスィーヤは「推奨、命令、助言」を含意する語根 w-ṣ-y の行為名詞であり、ジャーヒリーヤ期の慣行を受け継ぐ「遺言、遺訓」を表わす [Jones, 19]。

先述の『旅行記』の説教師であるイブン・アル＝ジャウジーは説教（師）の語解釈を行っている。彼の『クッサーズ（カーッスの複数形）とムザッキリーン（ムザッキルの複数形）の書』（以下『カーッスの書』と略す）は説教（師）に関する基礎的で最重要な史料と見なされている。しかしこの書物は不幸にも説教（師）に対する非難の書との誤解が広まっている。しかし Goldziher に始まり Pedersen に至るこの誤解は、Swartz の校訂本と英訳が出た今日、当該書を一読すればすぐに氷解するであろう [Swartz, 1971, 51-52; Hartmann-1986, 115, fn 255]。当該書は説教の必要性を解き、その実態を明らかにするとともに、説教（師）に関する賛否を等しく取り上げた理論書であり、ガイドブックである。（同様の無理解がスーフイーの説く愛を非難した書と見なされている『熱愛非難（Dhamm al-hawā）』にも当てはまる）。またシュワルツ本を訂正し、解説する Samarraī の新たな校訂本も出されており、本稿ではこの新校訂本を使用する。

『カーッスの書』では同じ忠告者、勧告者を表す語であるが、ワーイズは神への畏れ、ムザッキルは神への感謝を想起させると説く。そしてカーッスはワーイズと言い換え可能な語とされている [Swartz-1971, 46, 55, fn2, 57]。つまり当該書ではハティープ以外の3者、ワーイズ、ムザッキル、カーッス、が交換可能な語と見なされている。ゆえに本稿ではこの三者の総称としてワーイズ、ワアズを用いる。

本稿の目的は、ハマザーニー、ハリーリーの『マカーマート』中の説教（師）をテーマとする「マカーマ（逸話）」の内容分析、比較を行って、両者の異同を論じ、さらにこれらのマカー

マが説教一般とどのような関係を有するかを明らかにする点にある。ハリリー『マカーマート』は「第2のコーラン」としてアラブ文学の最高峰とされ、説教はムスリムの日常生活の核をなし、説教における為政者への賞賛を通して政治上の重要性を有していた。本稿はこのアラブ・イスラーム文化における重要な要素を占める説教とマカーマートの共通性を明らかにしようとするものであり、両者を結び付けるのは詩であることが示されるであろう。

イスラーム世界の説教や説教師に関する資料は歴史書、年代記、伝記集、ジャーヒズやイブン・アブド・ラッビヒらのアダブ物が主である〔Jones, 20-33〕。説教研究はGoldziherが嚆矢であり、Pedersen, Berkey, Swartz, Hartmann, Armstrongらの研究が続くが、現代の研究においてもその資料の稀少さが指摘されている〔Jones, 34; Athamina, 54〕。本稿は「マカーマート」を介してその説教研究の空白を埋める試みである。日本語では村山が説教師の社会的背景や人的関係、修得知識を詳細に分析し、塚田は一人の説教師の経歴を綿密に跡付けた。両者共に説教者の社会的背景に関する研究で、説教内容に踏み込まないと明言しているので〔村山, 20〕、本稿とその目的を異にする。波戸は本稿と同じく『マカーマート』を歴史資料として援用し、中世アラブ・イスラーム世界の奴隷の実態を探ろうとした研究である。

またGaffneyや八木らの現代の説教師の実体を明らかにするエスノグラフィカルな研究も参考になるし、Molanの説教テキスト（アラビア語-英語）は有益である。

『マカーマート』の引用は堀内の訳文を基本とするが、一部訳文を変更した。また「マカーマート」の表記はジャンルとしてのマカーマートを指す。

## 2. 「マカーマート」と説教

### 2-a. ハマザーニー<sup>6</sup>

「マカーマート」は説教と密接なつながりを持つ。「maqāmāt, sg. maqāma」の語がその相関性を示す。ハマザーニーはアラブ文学に新生を画した自作をマカーマートと名付けたが、マカーマは「立つ」を原意とする語根 q-w-m の派生語で、「立つ所」を原意とし、徐々に「立って話をする人」、「立って話をする人を聞く場所」、「立って話す人の話」を意味するようになり、「立って話をする人」の代表は、金曜礼拝時の説教師（ハティーブ）であった<sup>7</sup>。「qāma khaṭīban（説教師として立った）」〔Jones, 15, 18〕という表現や、「qaṣṣa ‘alā nās qā’iman（立って人々に説教した）」〔Ibn al-Jawzī, 77, Swartz-1971, 108, fn 2〕の表現が残されている。

また「立って話をする場」と言う意味のマカーマは<sup>8</sup>、「座って話をする場・集会」を表わすマジュリス（majlis）と対称をなす語とされた（Hämeen-Anttila, 65）。ハマザーニー第10話「イスファハンのマカーマ」では「このマカーマが終わるまで辛抱しよう」と表現があり、この「マカーマ」は明白に（説教の）「話し」を表す〔Prendergast, 14〕。

ハマザーニーが創始し、ハリリーが大成させた「マカーマート」は、語り手が各地で遭遇した事件の報告書の体裁を取り、主人公は変装の名人で、雄弁と博識を武器に人々を騙し、悪行を繰り返す。しかし、ハマザーニー作品では、この一人の語り手と、一人の主人公という形式は一貫しておらず、時には語り手自らが犯罪を行ったり（第12話）、主人公の悪事に加担することもある（第21話、第36話）。また主人公が登場しないマカーマもある（第51話）。

ハマザーニー作品の全52話には様々な説教師が登場する（10、11、16、26、41、49）。またハリリー作品の全50話は、1、11、21、（28）、31、41、（48）、50と、定期的に説教のテーマが扱われており、彼の著作意図を明示している。

ハマザーニーはこれらのマカーマで礼拝の実際や、多彩な内容の説教を描き、様々な説教師が登場させる。しかしハリリー作品に比べて一体に文章が短く、まとまりを欠き、マカーマとしての形式に従わない作品が多い。その中で、第49話「葡萄酒のマカーマ」は整った形式を取っている。語り手イーサーの青年期の回顧談として話され、飲み仲間（ナディーム）と一晩飲み明かし、飲み継ごとと酒屋（ハーナ）へ行く途中で朝の礼拝への呼びかけ（アザーン）を耳にし、一時の気紛れで一行は泥酔のままモスクに赴く。そしてあろうことか篤信者や支配階級者が座るべき最前列に座を占め<sup>9</sup>、イマームの真後ろに位置する。イスラームでは飲酒は禁止条項の最たる行為であり、聖なる場所（モスク）を汚す冒流行為である。このようにして、冒頭から緊張を孕む設定がなされる。

このイマームは一頻り念入りな礼拝行を行い、礼拝時間を徒に空費させ気紛れに立ち寄った酔っ払い達の怒りを招く。若者たちは怒りに任せて後ろの礼拝者達に気づかれぬようにして、このイマームを殴って失神させる。正気を取り直したイマームは、説教後、モスクの一角に陣取り、信者たちに、泥酔者が礼拝者に紛れ込んでいると指摘し、信者たちは若者たちを打擲する。若者たちは二度と聖なる場所（モスク）を汚さないと約束し、這々の体でその場を逃れる。

ここで話が終われば、飲酒行為や見せかけの信心がいかなる結果を招くかの説論だが、若者たちは、飲み直すべく、懲りずに飲み屋に行く。そこには昼間のイマームが悠然と杯を重ねている。若者たちは悪漢アブー・ファトフの変装、策略に引っかかったのである。このマカーマは、ふとした気紛れが悲劇を招き、見せかけの信仰心が禍を齎すことを生き生きと描き出す。ハマザーニーは同工異曲の話第10話「イスファハンのマカーマ」で繰り返す。

今回は旅の同行者を探すうちにアザーンの声が出て、やっと見つけたキャラバンが出立するのを横目に見ながらモスクに行く。ここでも冒頭で早くもサスペンスを催させる。語り手は礼拝を手短にすませて、一行の後を追おうと意図していたのである。その気持ちをあざ笑うがごとく、イマームはコーラン読誦を最も音声を引き延ばす流儀で行い、座礼、立礼の所作を念入りに行った。若者は隙あれば逃れようとしたが、場内は蟻の這い出る隙間もない。

ようやくのことに礼拝が終わって安堵するや否や、一人の男が立ち上がり、「夢で預言者を見た」と呼ばわった。男は続けて「預言者からドゥアー（祈禱文）を授かり、書き留めたが、所望の方にはお預けする」と言い、信者たちは争ってそれを買求めた。語り手はその行為を怪しみ、問い詰めると、やはりイスカンダリーの変装した姿であった。夢で預言者や神を見たと言ったり[Ibn al-Jawzī, 171]、怪しげな呪文を書いた護符を売りつけるのは、偽説教者の常套手段であり、ハリリーは第12話、39話のプロットに利用している[Goldziher, II, 251-253; Ibn al-Jawzī, 178, 215; Swartz-1971, 149, 204]。

この2つのマカーマは、説教は説教者と聴衆の共同作業であることをよく示すとともに、無知な大衆（‘amma）の軽はずみさ、軽信ぶりを描き出す。イスカンダリーはそんな大衆をロバと呼び、カモとする[Hamadhānī, 185]。説教の実際は第26話「訓戒（wa‘z）のマカーマ」で



描かれる。語り手がバスラの町を散歩中に広場に出、そこで「一群の人々が立っている人物を取り囲んでいた。この人物は周りの群衆に訓戒を垂れていたのである」、と直截に説教のテーマを導入する。男は現世の儂さを説き、奢侈に耽ることの無意味さを指摘し、最後の審判に備えるようにと説く。説教者は殉教者フサインの息子で「信奉者たちの至宝 (zayn al-'abidin)」と讃えられるアリーブン・フサインの言を引き、韻文と散文を交互に混ぜて見事な説教を行う。そして流麗な詩句で説論する。

俗世で辛酸舐めた汝の体験、まだ不十分とはいえ

承知のはず、俗世を捨て、敬虔さに精進すべきことが  
されば猛省怠るべからず、汝が人生浮世ならば  
とどのつまり汝が戻り逝くは 死の館なるを知れ

[堀内-2011、222]

そして語り手がこの説教者は何者かと問うと、「彼のマカーマが終わるまで待てば正体が分かる」との返事を得る。先述のようにこの場合の「マカーマ」の語は文学ジャンルとしての「逸話」ではなく、その原意たる「立っていること、立って振舞っていること」、つまり「男の話」、「説教、訓戒」を示す。このマカーマの語の使用とタイトル (ワアズ) からして、本マカーマ (逸話) は説教を主テーマとすることは明らかであろう。ゆえに事件、出来事ではなく、説教の詞章が眼目である。本マカーマでは説教に対する聴衆の反応の描写も少なく、説教師が聴衆から金品を巻き上げる場面も描かれていない。それゆえ散文に続く3行詩が本マカーマの眼目である。この「散文+詩行」という同一構成の繰り返して文章全体にリズムを生み出し、その形式を繰り返す漸増法により、興趣を徐々に盛り上げる。そして挿入詩は全てr音で脚韻し、韻律もタウィールで一貫している。つまり、5個所の挿入詩は1篇の長詩 (カスイーダ) を分割配置したものと見なせる。「マカーマート」の文章は単にサジュウと称される押韻散文であるのみならず、全体が「散文+韻文」の構成になっている。そして話は主人公が死の恐れを警告する詩行でクライマックスに達する。この「マカーマート」全体に通底する基本構造と文体の特徴を如実に示すマカーマである。

マカーマ (逸話) の通例からして、主人公 (アブー・アル=ファトフ) は (偽の) 説教を介して人々を悔悟に導き、布施を出させる手段に訴えるのは容易であろう。しかし本話では説教者は布施を求めることなく、語り手に身分を明かして静かに退場する異例の結末となっている。(偽) 説教者が布施をせびらず、聴衆の反応も描かれていない主な理由として、本来ハマザーニーの『マカーマート』は全26話であり、ハリリー作品が定型化してから、無名の編者がハマザーニーの様々な著作から拾い集めて52話に編纂したとする説が有力である [Hämeen-Anttila, 89-92]。それゆえ本マカーマ (第26話) が本来の最終話であり、編者は『マカーマート』全体のまとめとして訓戒、説教のテーマとしたのだろうと推測される [Hämeen-Anttila, 93]。それは丁度ハリリーの最終話 (第50話) で、主人公を改悛させ、説教する姿を描いているのと軌を一にする。

第11話「アフワーズのマカーマ」ではさらに鮮明に説教の実態が描かれる。語り手が飲み仲

間と連れだって酒の買い出しに出かける途中で、襤褸衣を纏い、棺桶を担いだ老人と遭遇する。若者たちの浮かれ気分はたちまち醒めて、男の話（説教）に聞きいってしまう。墓地は説教の絶好の場所であり、棺桶は墓地の代わりを務める仕掛け物である。ハリリーは第1話「サヌアのマカーマ」を墓地での説教をテーマに展開させる。

老人は棺桶を目前にして不吉な思いに駆られた若者達に直ちに訓戒を垂れる。「どうしたことだ。不吉な思いをすとは。皆さんの祖先がかつて乗せられて行き、子孫もやがて乗せられるであろう乗り物前にして!」、と死を意識し、死に備える必要性を説くこのマカーマにおいても説教師たる主人公は聴衆から金品を巻き上げることはない。

第16話（盲人のマカーマ）では、語り手が広場で盲人が群衆相手に己の窮状を訴えているところに遭遇する。いわゆる説教の範疇には入らないが、説得術の例として挙げておく。男はどのように詩で訴えかけていた。

おお、皆様方、この私めは負いし借金、余りに多く我が背骨を折り曲げんばかり  
我が妻の婚資返済の求め、また責めに攻め追い打ちをかける…  
若き方々、あなた方の中には居られませぬか、物惜しみせぬ方が  
我を助けることのより神の加護、大いなる報償来世にあるべきに [堀内-I、87]

眼が不自由でみすばらしい身なり、それに不釣り合いな流麗な詩の朗誦。この外見と内実（雄弁）の落差の衝撃により、聴衆は次々にディーナル金貨、ディルハム銀貨と布施を差し出す。この外見と内実の落差を利用し、詩の力を最大限に援用するのが『マカーマート』に通底する基本構造である。説教のテーマのマカーマは、その構造を最も鮮やかに浮かび上がらせる。

## 2-b. ハリリー<sup>10</sup>

先述のようにハリリー作品は1、11、21、(28)<sup>11</sup>、31、41、50と規則的に説教をテーマとするマカーマ（逸話）を配置して、『マカーマート』全体の著作意図を鮮明にしている。さらに最初に書かれたとされる第48話「ハラーム寺院のマカーマ」で悪行を重ねてきた主人公に（偽りの）改悔を述べさせ、続く第49話（サーサーンのマカーマ）で詐欺集団（バヌー・サーサーン）の長として息子に遺訓を垂れ、最終マカーマ「バスラのマカーマ」で最後の（偽）説教に臨み聴衆から布施をだまし取り、姿を消させる。その後主人公は改悔し真率のスーフイーとなり、人々の尊崇を受ける。このようにして、ハリリー作品は最初（第1話）と最後（第50話）に説教（師）をテーマとするマカーマを置いて枠構造を作り、さらに10話毎に説教（師）のテーマを取り上げて、『マカーマート』全体の著作意図を鮮明に示す。

「預言者昇天物語（ミウラージュ）」、「アラブ恋愛詩（ガザル、ナシィーブ）」を筆頭に、アラブ文学のヨーロッパ文学への影響が指摘されているが、前者はダンテ『神曲』に影響を及ぼし、後者はトゥルバドゥールに着想を与えたとされている。そして「マカーマート」はスペインの「ピカレスク物語」との影響関係が指摘されている[杉田、115~132、参照]。悪行を重ねて最後に回心する人物の一代記としての構造は似通っている。ただし、モデルとされるハリリー作

品では、後述のように雄弁と博識を基に人を陥れるのであって、ピカレスク物語の犯罪行為を繰り返す人物とは主人公像、テーマ、ストーリーにおいて、根本的な相違を来している。

ハリリー作品の第1話「サヌア（サンアー）のマカーマ」は、語り手が集會場で泣きわめく群衆に出合う場面で始まる。人々は旅装束で痩せぎすの人物の説教で号泣していた。男は無駄話にうつつを抜かし奢侈に溺れる生活を怒り、死の到来の必然を説き、喜捨（サダカ）よりも婚資金（マハル）の額に心奪われ、欲に塗れた生活を非難する。最後に以下の詩を朗唱する。

禍あれ、現世に諸物を求める者／掠め取りし財貨を、現世に貯めこむ者  
また現世の病に侵され回復せぬ者／財物への貪欲病と過度の偏愛病との  
かくなる人物がわずかの残り水で／足るを知るのを願うのみ [堀内-I、87]

この譴責を受けて人々は争って男に金を捧げる。先に紹介したハマザーニーの第16話と同工異曲の作品である。しかしその行状を怪しんだ語り手が男の後を追うと、男は洞窟に入り、そこには白パンとヤギの炙り肉が置かれ、酒壺までもがあった。こうして語り手は、男の裏表ある生活に気がついた。

この第1話はマカーマートに通底する形式、構造、文体、テーマ、の全てが揃っている。ハディースに倣う伝承形式（イスナード）、語り手が旅先で主人公の犯行を目撃した回顧談、韻文と散文の混交した文体、語り手と主人公が出会いと別れを繰り返す円環構造、そして雄弁で人々を籠絡する手口、主人公の裏表。そして説教のテーマ。先述のように最初に書かれた第48話も全く同じ内容、形式を有す。

第21話「ライのマカーマ」で語り手は広場での人ばかりを見つけて、その場に入って行く。するとカランスワ帽を被り、タイラサーンの外套を纏う男が説教を行っていた。男の話は、聞き入る人々に癒しを与え、岩（のような頑なな人々の心）を和らげていた。「アダムの子よ。あなたは上辺を欺くものに何と心をば奪われていることか」と人々を非難し、現世の富に執着する愚かさ気づかせ、死を恐れよと説く。そして詩を朗誦し始める。

汝が命にかけて。立派な家を建て／財産を蓄えたとして、何の役にたつのか  
既にどれ程多くの 分限者達が地下の／住民となり、長居強いられていることか…  
さればアッラーをば、ひたすらに畏れよ／恐れ畏こみ、たてまつれ  
下さればこれほど恐ろしきものとなつて／その罰より逃れるべくして  
怠ることなかれ、汝が犯せし罪を／常に脳裏に刻みつけておくこと

聴衆は止めどなく流れる涙と、あからさまな悔悟の渦中に留まったままであった。[堀内、II、159~162]

現世の富に執着する愚かさを説き、聴衆を改悛に導くが、このマカーマでも（偽）説教師は参列者から布施をだまし取ることはない。

さらに第11話「サーワのマカーマ」では説教の場を墓地に設定する。ハマザーニーの第11



話が棺桶を担いだ人物の説教をテーマとしていたが、死と直結する棺桶や墓地は、現世の儚さを説き、死を身近さに気づかせ、死後の懲罰の厳しさを教え諭すには絶好の背景となる。

語り手が会葬者として埋葬を済ませた時に、ある老人が、「このような事（死者への哀悼）のためにこそ、人は精進すべきもの！ おお（来世への思念を）怠る人々よ、念ずべし！ おお（敬虔さを）疎かにする人々よ、努力するべし！ おお打算的な人々よ、よく見つめるべし！ どうしたことか、生まれも同じ人々が埋葬されようというに、嘆き悲しまないとは、（埋めた棺に）土をかぶせることに何の畏怖感も抱かないとは！」[堀内、I、322-323]と、墓地や埋葬に相応しい話題を通して、会葬者に現世と死の意義を説き、会葬者を畏怖させる。老人はさらに言葉を継いで、48行にも亘る長大な詩で、人々が現世で重ねている罪を指摘して改悛させ、懺悔の布施を出させる。アラブ詩（カスィーダ）は通常20行ほどを標準とするが、その意味でこの48行は異例であり、同内容を詩中で繰り返すことにより、参列者の感情を高める。

何時まで食ほらんとするぞ／死に対する無関心をば  
何時まで歩まんとするぞ／虚栄に過ぎぬ安楽な道を  
何時まで続けんとするや／善事に遠き汝が行為 [堀内、I、327]

このように熱烈に富の虚しさ、死の身近さを説き、聴衆を納得させた後で、最後にこう詠う。

おお集りし皆様方／かくなる言がわが教え  
明らかなる教示として／頂門の一針と諫めしもの  
されば幸福約束されん／我が説きし道歩む者  
己が進まん人生を／導く指針とする者に [堀内、I、336-337]

説論者（老人）が聴衆に懺悔の道（布施行）を示すと、参列者は易々と財布の紐を緩める。

アラブ・ペルシャ文学の碩学ニコルソンが2度に亘って英訳、紹介した本マカーマは、説教以外に事件は起こらず、そのテーマは説教にあることは明白である。そして聴衆を回心させて布施を出させる手段が長大な詩である点も明瞭である。コトバ（詩）の力をまざまざと示すマカーマである。

## 2-c. 遺訓 (waṣīyya) のマカーマ

どの時代、いかなる文化圏であっても、為政者が後継者に施政の要諦を解き明かし、親が亡くなる前に子弟に処世の知恵を残す慣習を有するであろう。これらは遺言、遺訓と称される。アレキサンダー大王やナポレオンの遺言は広く知られている。わが国でも戦国武将の伊達政宗や徳川家康、そして明治の元勳西郷隆が残した「南洲遺訓」は名高い。このように遺訓は説教の1ジャンルと見なせよう [Jones, 19-20]。イスラーム世界では預言者ムハンマドの最後の巡礼時に残した「告別の説教」がその習慣の嚆矢をなし、後世の規範となっている [Guillaume, 651-652; 後藤他訳、3、515~519]。

ハマザーニー、ハリリーはともに遺訓に関するマカーマを著わしており、内容、文体において両者を比較すると「マカーマート」全体に通底する両書の異同が明らかになる<sup>12</sup>。

#### a. ハマザーニー

ハマザーニーの第41話「ワスィーヤのマカーマ」は、訳者の堀内が「世渡り商人としての心得」と副題を添えているように、老齢になり引退を決めた商人が、息子に与えた处世術、商売の要諦の伝授をテーマとする。主人公アブー・アル＝ファトゥフは冒頭で「寛容、寛大さ(karam)」と「食欲(qaram)」が身代を潰す2大原因(=盗賊(liss))と論ず。この押韻する2語(karam, qaram)を廻って話は展開する。

寛大さはアラブ民族のみならず、ムスリム全体の最重要の徳目である。ジャーヒリーヤ期より厳しい環境下に暮らす沙漠の民(ベドウィン)にとって、頼ってきた人物を保護し、歓待するのは最大の徳目であり、「男らしさ(murū'a)」を発揮する機会でもあった。夜半の不意の来客に備える宿营地前の篝火は「歓待の火(qira)」と名付けられている。その歓待の観念、行為はイスラーム勃興後も継続され、宗教的義務として「歓待は三日まで」と定められるようになった。頼ってきた庇護民には無条件、無償で三日間は歓待せよとの教えである。

しかし本マカーマでは真っ向から「寛大さ」を否定する。そして、あろうことか、「人々の言っている『まことアッラーは大なり』と言うのは止めて欲しい。それは離乳させようとする乳児に対する子供騙しに過ぎない」[堀内(2014)、391]との過激で異端的な言葉を吐く。ムスリムは事有る毎に「慈愛溢れ、慈悲深き神の名に懸けて(bi-sm l-Lāhi r-rahmāni r-rahīm)」とバスマラと称される句を唱える。

カラムと同語根のカリームは神の99の美称の一つであり、人名として好まれ、また聖なるコーランやラマダーン等にも冠される。自己の富保存のために、かくも重要な徳目を否定する人物をハマザーニーは設定する。この商人は富を害う2番目の理由に食欲を挙げ、パンと塩のみの一日一食(ワジュバート)を勧め、「酢と玉ねぎはお前の許可制とし、肉は筋肉を造るので食べる必要があるが、ほどほどにし、甘い物(デザート)は、その節制をしない者は病気に繋がる」[堀内(2014)、392]と禁欲者(ザーヒド)並みの清貧を勧める。そして処世上、人付き合いは、自分の物はしっかり保有し、相手の物は全て奪うチェスのプレイヤーの態度でいと指示する。

アダブ物に代表される逸話の編集集は、逸話の採集、選別と、その配列に編者の創造性が発揮される。ハマザーニーの『マカーマート』の編者や、各逸話の配列順の意図は明白ではないが、『マカーマート』全体を見通して各話を位置付けたとしたら、興味深い事実が浮かび上がる。

ムハンマド・アブドフ編は「遺訓のマカーマ」(第41話)を「知識のマカーマ」と「サイマラのマカーマ」の間に置く。「知識のマカーマ」は旅先で「どのように知識」を獲得したのかと尋ねる人物(アブー・アル＝ファトゥフ)に出会い、彼が自己の修得方法を説明する内容であり、雄弁も物乞いも行わない異質のマカーマである。男はイスラーム世界の慣習である「知識を求める旅(ṭalab al-ilm)」を通して知識に触れ、それを暗記したと明かす。このマカーマに主人

公の生き方が露にされていると同時に、知識を求める旅を続けた作者の姿が重なる。

また「サイマラのマカーマ」は実在の人物であるアブー・アル＝アンバス（888年没）[EAL, qv. Abū al-‘Anbas (S. Moreh)] が自己の有為転変話を語るという異色のマカーマで、通常の主人公（アブー・アル＝ファトフ）は登場しない。サイマラは一代で財を成してバグダードに着き、名士を招待して盛大な宴会を繰り広げる。やがて散財により無一文になるとかつての客人たちは、道で出会っても顔を背ける始末。そこでサイマラは一念発起して再び旅あるに出て、刻苦精励の後、再び財を為し、都に帰る。その噂を聞きつけてかつての客人たちが何事もなかったかのように現れ、サイマラの招待を受ける。やがて酔いつぶれ、寝入った間に彼らの髭を剃り落として復讐を果たすという「金の切れ目が縁の切れ目」の物語である。

「遺訓のマカーマ」を含むこれら3マカーマは、旅において博識と雄弁が修得され、財産が人間関係の要だとする著者、あるいは編者の意図が感じ取れる。主人公（アブー・ファトフ）は犯行が露見した時に、「時代（dahr）が悪い」と常に自己弁護する。このような処世訓を「実利主義（materialistic）」「ご都合主義（opportunism）」とスチャートは評する[Stewart, 148]。

#### b. ハリーリー

第49話は「サーサーンのマカーマ」と題され、遊行、物乞い集団であるバヌー・サーサーンの長が息子に遺訓を与える内容となっている<sup>13</sup>。

先ず父親は官僚（imāra）、商売（tijāra）、農耕（zirā‘）、職工（šinā‘a）の仕事内容と収益を検証し、それらと比較して己の職業がいかにかに有益であるかを示す。官職を目指すのは夢と現実の混同であり、為政者の意向に左右される役人は「無理やり離乳させられる苦痛を味わう」と評する。商人は常にリスクに晒され、その商品は略奪の的として狙われる。そして商人は「風翔ける鳥」に譬えられると説く。そして、土地にしがみ付き、地面を耕す農民は、農耕そのものが自尊心を殺ぐ卑賤な職業だとする。さらに、職人は稼ぎが少なく、人生の大半を作業に費やしていると評する。このように士（官）農工商を論じ、翻ってサーサーン集団の行動原理、職業倫理を称揚する。自身の行いを鳥の自由さに例え、何物にも束縛されない自由さ、いかなる権威にも服さない不羈の才に恵まれている利点を指摘する。

次いで稼ぎの要諦を説き、①機敏な行動、②移動、各地の遊行、③厚顔に積極的、④情報収集、⑤運を味方にする、等々の要素を伝授する。そして逆に、①無欲さ、②怠惰、③不活発さ、④淡泊さ、はサーサーンの生き方に反し、極力排除すべしと説論する。

ハリーリー作品の遺訓の内容は物乞い業（kudya）の遺訓にも関わらず、常識に則り、いかなる職業に対しても当てはまる処世術である。対してハマザーニー作品はムスリムの倫理規定の最重要課題である「寛大さ」を非難し、否定する常識破りで反イスラーム的内容である。主人公は富裕な商人とされているが、彼は『マカーマート』ではバヌー・サーサーンの一員とされている（第19話）。それゆえこの第41話の主人公も物乞い業に携る人物とも解しうる。無頼、物乞い集団の一員としては、他人の愚鈍さや寛大さにつけ込むのが稼業の秘訣であり、また各地を遊行する必要性から常に飢えに直面し、故に食への貪欲さが求められる。中世アラブ・イスラーム世界にはナディーム（食客）という人物や、トゥハイリー（押しかけ食客）という

人々がいたが、ハマザーニー作品は食い逃げ（12、36）、饗応をテーマとするマカーマ（9、22、34、42）が多いのもその特徴の一つである。このように「遺訓のマカーマ」においても、ハマザーニーは下層民の処世術を扱い、ハリリーは常識的な遺訓という、両書は内容面で相違を見せる。

### 3. 影響の不安

マカーマート・ジャンルはハマザーニーが創始し、ハリリーが大成させたと思われているが、文体、構成、の両面でこれら2作品を比較すれば、両書の優劣は明白であろう。2作品の日本語訳を行った堀内は、しばしばハマザーニー作品の各話が短く、また逸話が中途半端なままに終わっている点を指摘し、そのストーリーの未完成さを非難する。

事態はアラブ文化圏でも同様であり、ハリリー作品はマカーマート・ジャンルの規範とされ、「第二のコーラン」とまで評価され[堀内-2008、50]、アラビア語著述の模範となった。その栄光の前にハマザーニー作品は埋もれて人々の関心を引かず、現代に至るまで信頼に足る校訂本は無い状況である[Hämeen-Anttila, 38, fn 4]。さらにはハマザーニー作品の標準的で広く用いられているムハンマド・アブドゥフ版やアブー・ハミード版は、「シリアのマカーマ (al-maqāma al-shāmiyya)」の内容が公序良俗に反する「卑猥話 (mujūn)」として全文削除され、本来の52話から1話少ない状態で流布している[Hämeen-Anttila, 38]。

これに対してハリリーは生前に自己の講義を通して700以上の免許状(イジャーザ)を下付したという[Stewart, 150]。そして後続のアラブの文人(アディーブ)たちは、文章力を誇示し、ハリリーに挑むべく自己の「マカーマート」に筆を染め、あるいは学識を披露すべく注釈に勤しみ、その注釈は100を超える隆盛ぶりである[Hämeen-Anttila, 76, 368-410]。このような文学環境下、ハマザーニーがマカーマート作者として辛うじて名を残したのは、偏にハリリーが自作の序文でハマザーニーに言及したからである[Harīrī, 35-40]。

さてあれはさる教養人の集まりの席 ('andiyat al-adab) のこと、その時刻柄、場の雰囲気も淀みがちで、知的光明も消えかかっていた。そんな折、話題がハマザーンの大学者 ('allāma) バディーウ・ツザマーン師の創作になる ('ibtada') 『マカーマート』に及んだ。その中で師は筋書きをアレキサンドリア出のアブー・アル・ファトフに託し、その語りをイーサー・ブヌ・ヒシャームに託している。両名とも誰とも知られない無名の人物であって、誰と同定できないナキラ(不定名詞)なのである。さる高官がそのようなものを私に書くようにと勧めてくれたが、その勧めは一種命令のようなものであり、私も従う方が益も多かろうと思った。そして遂に意を決してバディーウ師の語り的手法に沿うてマカーマートに手を染めることにした。とはいえ足悪の馬 (zali') が強健な馬 (dali') の走りにどうして追い付けよう。 [堀内、I、71-72]

10世紀以降、アラビア語散文作品の序文には神への感謝を示す語句と預言者ムハンマドへの賞賛句で書き始めるのが定型化しており、その後パトロンたる人物への贈呈句が続く[Orfali,

185-188]。引用文では献呈者（著述命令者）の名は明かされていないが、諸説あり、セルジューク朝の大臣であるアヌーシルワーンの名が挙がっている[堀内-第1巻、44]。

ハリリーはこの序文でハマザーニーのジャンル創始者としての功績を認め、その文才を最大限に賞賛している。それゆえハリリー作品の読者はハマザーニーの名に触れ、その作品を読むが、両者の優劣は一読明白となる。イスラーム諸学の広範で深い知識、アラビア語文法学に基づく華麗で精緻を極めた修辞法、引用される自作詩の多さと長さ、等々の何れの面においてもアラブ知識人や文人の嗜好に合致し、ハマザーニー作品は太刀打ちできない。ゆえにハマザーニーはリサーラ作者としての名声は保持したが[Stewart, 147]、マカーマート作者としてはハリリーの陰に隠れてしまった[Hämeen-Anttila, 75-78]。やがて叢生したハリリー亜流の作品は徒に文体に凝り、よってマカーマート・ジャンルは中国文学における四六駢儷体と同じ運命を辿り、煩瑣な文体、陳腐な比喩で内容空疎な作品が数多く生み出されるようになった。

しかしハリリーの序文は別な解釈も可能である。文学の創造行為における後続者が先行者に抱く「影響の不安 anxiety of influence」という概念である。英文学で言えば T. S. エリオット（1956年没）がシェイクスピア（1616年没）に与えた影響ということだ。時代を逆転させた影響を指し、日本文学でいえば谷崎潤一郎が紫式部に与えた影響を指す[土田、98~101]。

「影響の不安」説の主唱者 H. ブルームによれば、後続者は先行者を規範として仰ぎ、その影響を強く意識する。しかし先行者への意識が強まるとエピソードに留まり、自作はモデルたる先行作品の単なる模倣、その摩耗コピーにしかならない。ブルームはサブ・タイトル（詩の理論のために）が示す如く、ミルトン（1674年没）以降の英詩人を分析対象としているが、土田や小谷野が説くようにテキスト理論の一環として文学一般に適用可能である[土田、82~83；小谷野・宮本訳、13~18]。ブルームは先行者の影響から抜け出す6つのアイデア（修正比率 revisionary ratios）を提供する<sup>14</sup> [Orr, 68-69; 小谷野・宮本訳、36~38；土田、90~91]。ハリリーの序文はこの事実（影響の不安）を如実に示す。先行者（ハマザーニー）を称揚し、自己を卑下しながらも、同じ序文では自己の文才、学識を誇示する。

ただこの私のマカーマ作品の中には精魂込めたものがある。言語がいかに大事であるか、その生き生きとした躍動性、表現の細かな微妙さ、その新奇生む底深さを…文法を主題にした謎々、言語に関したファトワー（提言）、誰も試みたことのないリサーラ（書簡）、技巧を働かせたフトゥバ（説教）、涙を誘う忠言、心和ます冗句などをちりばめた工夫がある。また私が意図したものの中に、牧草地をムハンマドの柔地に変えた作品がある。それは読み手の読書欲を活気付けたいためであり、読者層の広がりを一層大きくしたいがためである。[堀内、I、73]

ハマザーニーのジャンル創始者としての功績を認めながらも、その影響を脱し、その模倣に陥るのを避けるべくハリリーは先行作品（ハマザーニー）の換骨脱胎を図る。ハリリーの先行作品への挑戦は『マカーマート』の書き出しで示される。時代の驚異と称されたハマザーニーはフィクショナルな作品への忌避感を、作品冒頭にハディースに倣うイスナードを置くこ



とで払拭したが (haddathanā...qāla)、ハリリーはこの表現を「hakā...qāla」に置き換える。hakāは「物真似する、話す」を意味し、同語根語 hikāyaは「話、物真似」を意味し、強く世俗性を帯びる。このようにしてハリリーは先行者の意図を覆そうと試みる[Young, 57-58]。

更なる先行作品の換骨奪胎の手法が上記引用文中で誇る種々の取り組みである。自作詩を多用し、修辞を凝らした華麗な文体を駆使する。何れもハマザーニー作品に欠けている点である。(ただし後述のように、修辞の下に物語性を消がことになる)。このようにして後続のハリリーは先行者のハマザーニー作品の読みに影響を与え、彼の作品を歴史の中に埋没させた。

アラブ文学の嫡子、正統性を示すために文学論、文法論、法律論をテーマに描き、主人公を万学の雄、アディーブの理想として設定する。この点が下層民を主とするハマザーニーとの相違である。

そのハリリーが定式化した「マカーマート」は、語り手が旅先で見聞した無頼漢の犯行の目撃談、ハディースに倣うイスナード、韻文と散文の混交、文体はサジュウ、という形式と内容を持つが、やがて時代が下ると、マカーマートに非ざるマカーマート、即ちマカーマートと冠されていても定式を守らない作品、内容面で医学や思想等をテーマとする作品が生み出される[Hämeen-Anttila, 75-87]。その濫觴はザマフシャリー(1144年没)やイブン・アル＝ジャウジーの娯楽性の欠けた「説教、訓育」を内容とする『マカーマート』である<sup>15</sup>[*ibid.*, 179-182]。そしてマカーマート作品は内容面は等閑視され、徒に煩瑣な文体(サジュウ)を誇る作品を指すようになり、「リサーラ(書簡論文)」との異同が曖昧になった<sup>16</sup>。マカーマートとリサーラに共通する文体、すなわちサジュウ、の影響力は根強く、現代に至るまで、著作のタイトルや序文に使われ続けている[Orfali, 182-183]。

しかし未完成で未熟と見なされた創始者ハマザーニーの作品には、豊かな物語性や、新奇的な仕掛け、演劇テキスト(戯曲)に匹敵する臨場感が込められていた。それらは裁判をテーマとするマカーマヤ[Cf. Okazaki; 岡崎(2005-a)]、傑作とされる言葉の洪水「マディーラのマカーマ」[岡崎-2005]、「千夜一夜物語」のシンドバード物語に匹敵する「サイマラのマカーマ」(第42話)、遊牧英雄譚に類似した第51話「ビシュルのマカーマ」で発揮されている。

アラブ文学<sup>17</sup>はジャーヒリーヤ期より連綿として詩を中心としてきた。その中で散文作品はアダブ物を主としてきた。アダブは文学と訳されるが、近代(1800年代)以前のアダブの語を「文学」と訳するのは不当であり、ジャーヒズ、イブン・アブド・ラッビヒ、イブン・クタイバ等を代表とするアダブ物は創造力(想像力)を駆使した「文学作品」ではなく、「逸話の集成集」である。それゆえアダブ物の編者の力量は、逸話の収集と選択、その配置において発揮される。アダブ物は文人や書記官僚、あるいは食客(ナディーム)に必須の知識を提供する意図で編纂されている[岡崎-2004、参照]。ハディースやアダブ物は内容の真实性が求められており、それゆえアラブ・イスラーム世界には広くフィクショナルな作品に対する忌避感が横溢していた。その文学環境下、ハマザーニーは冒頭に無名の人物をハディース(話、談話)、マカーマ(逸話)の語り手に置き、これも正体不明の人物を主人公に据えた。冒頭に付されたイスナードゆえに、実話であることを疑わぬ読者(聴衆)は、この語り手と主人公の実在性を疑わず、その身元の設定に精を出した[Hämeen-Anttila, 40-43]。

ハディースに倣うイスナードを付すことでフィクショナルな作品に対する忌避感を払拭したハマザーニーは、下層民を主人公として内容面でも斬新さを発揮し、短い実話や教訓話、あるいは俚諺しかなかったアラブ散文文学に新生面を開いた。バヌー・サーサーンを主とする犯罪者集団、無頼漢、放浪者、偽医者、偽説教師、等々の生態や犯罪の手口を流麗な詞章に乗せて描く。そこには詩にはない物語性、躍動感、臨場感、あるいは劇的サスペンスが込められている。また下層民に対して代官、大商人、あるいは巡礼者を被害者にする事で、ハリリーにはない社会批判やアイロニーが描かれる。

そして最も多く採用されているのが「説教のテーマ」である。このテーマでハマザーニー、ハリリー両作品の主人公は対称をなす。ハリリー第11話、第21話、第31話の説教師は十分に聴衆から金品を騙しとる機会があるにも関わらず静かに姿を消す。他方ハマザーニー作品では主人公のみならず、老妻や息子をも騙し行為に加担させて、聴衆から布施を巻き上げる。そして棺桶を担いで登場と、読者の意表を突く。

さらに「遺訓のマカーマ」でも両者は対照的であった。世間の良識に反し、宗教を冒瀆する主人公（ハマザーニー）と、常識的で模範的な徳目を説く主人公（ハリリー）。確かにハリリー作品は構成が緊密で、首尾一貫しているが、主眼はストーリー展開ではなく、あくまでも文章、文体が主体である。他方、ハマザーニーは人間の生態、人間心理の機微を描き、行動論理の隙を露にする。そこから物語性が浮かび上がる。

近代になりアラブ文化において西洋流の小説（ノベル）を創生するに際して手本とすべきは「マカーマート」しかなかった。しかしそれはハリリー流の凝った文体を駆使用する作品ではなく、物語性豊かで人間性の機微、生活の細部を描いたハマザーニー作品であった。

ムワイリヒー（1868～1930）は先行者への「影響の不安」を抱えながらも、自作を『イーサー・ブス・ヒシャム物語（Hadīth ‘Īsā ibn Hishām）』と題し、ハマザーニー作品の語り手の名前を冠した。この事実によりハマザーニーとハリリーの評価は逆転し、ここにハマザーニー作品のレガシーが完成した[Allen, 185-186, 276; Hämeen-Anttila, 197]。（なお、『脚の上に脚（Sāq ‘alā al-Sāq）』で知られているシドヤーク（1887年没）は主人公名を al-Hārith ibn Hithām としたが、この名はハマザーニー作品の語り手（‘Īsā bn Hishām）とハリリー作品の語り手（al-Hārith bn Hamām）の合成語である[Allen, 181]）。

ハマザーニー作品の本質を文体にありと誤読することで、先行者への影響の不安を脱したハリリーは過去のみならず未来（ムワイリヒー、シドヤーク）にも影響を齎すことになる。

#### 4. 説教・マカーマート・詩

ここまで考察してきたように、「マカーマート」と説教は密接な関連を有する。そして、本稿第1章で紹介したイブン・ジュバイルの『旅行記』中の説教師は、ハンバル派のウラマーのイブン・アル＝ジャウジーであった。彼は名声を博した高名な説教師であったのみならず、中世イスラーム世界最高の説教に関する理論家とされている[Armstrong, 3; Halldén, 24; Swartz-1971, 36, 68]。この理論と実際両面に亘る権威者の「説教（師）論」（『カーッスの書』）を基に、「マカーマート」と説教の関連とその意義を考えたい。（本稿では、ハリリーが定式化した「マカ

ーマート」とは内容、形式ともに異にするゆえに分析対象としなかったが、イブン・アル＝ジャウジー自身も『マカーマート』を著わしている[本稿、注25。Stewart, 155]。

イブン・アル＝ジャウジーの熱烈な説教を聞いた聴衆は陸続と悔悟し、前髪を切り落とし、泣きわめき、地面を駆けまわる程の陶醉状態(wajd)に陥った[藤本・池田監訳、297～305]。イスラームにおける説教の目的は聴衆に現世の儂さを説き、富の虚しさに気づかせ、最後の審判を懼れ、来世に備えさせる点にある。つまり説教を通してイスラームの知識と歴史を教え、聞き手の生き方を変え、死と神に直面させるのを主眼とする。そこにはキリスト教が「愛の宗教」と称されるに対して、イスラームが「法の宗教」とされるその独自性が関わっている。

イスラーム信仰は所謂6信5行に纏められるように、イバーダート(儀礼)とムアーマラト(実践行為)の両面を含み、信仰と実践行為が不可分であり、ムスリムは日常生活の細部にまでコーランとハディースに従う、つまり、ムハンマドに倣う生活を理想とし、その生き方に従おうとする。ここに聖俗を分けないイスラームの特性があり、信仰生活と日常生活の両面を規定するイスラーム法(シャリーア)の独自性がある<sup>18</sup>。ゆえにムスリムは法源たるコーランやハディースの知識を求めているが、その機会は少ない。よって無学で宗教知識に欠ける一般庶民にとって説教の場が唯一宗教知識に触れる場であり、説教参加者の熱狂ぶりは、彼らの宗教知識への渴望の現れである。現代に至るまで説教師は聴衆から寄せられた疑問に、適切な回答を説教中に行う慣習は続いており、モランはサウジアラビアの例を挙げる[Molan, 155-161]。

イブン・アル＝ジャウジーの説教には3万人とも30万人とも言われる聴衆が蝟集した。そして、ウラマーは100人しか悔悟させないが、自身は千人単位で人々を悔悟させると説教師(イブン・アル＝ジャウジー)は豪語する[Hartmann-1986, 54; Swartz-1999, 208]。

イスラームは頭(理性)と心(感情)両面が含まれていると言われる。それゆえ知識に欠ける庶民には理性的に信仰内容を説くよりかは、心、感情を通して知識を伝える方がより効果的である。心に直接訴えかけ、感情を揺さぶるには詩、わけてもジャーヒリーヤ期よりアラブの心を打ち、記憶に止められている恋愛詩(ナスィーブ、ガザル)が有用であろう。

演説や説教は説教者(演説者)と聴衆(読者)との共同作業である。説教者(演説者)は常に聞き手を意識し、自己の意図が伝わり、所期の目的を達成しているかに留意する必要がある。それゆえ説教師にはイスラーム諸学の研鑽のみならず、聴衆を悔悟に導く学識と説得術の習得が求められる[Swartz-1999, 37-38; Pedersen, 221; Hartmann-1986, 102; Halldén, 20]。

特に一般大衆を相手に説教する場合、聴衆の魂を揺さぶり、心情に直接訴えかけるには、話の内容よりかは、説教師の外見、態度、衣服やジェスチャーの方がより重要な要素となる[Swartz-1999, 48]。つまり、重々しい態度、通常とは違う衣服、あるいは身に付ける携行物、等々が聴衆に影響を与えるであろう。「マカーマート」で描かれているように、説教者はカランスワ帽を被り、タイラサンを纏う。手にはムハンマドに倣い剣、槍、杖を携える。さらに説教の効果を高めるには、発話の抑揚や音調にも留意する必要がある。そして、特に演説中に詩を挿入すると、詩のリズム、押韻、イメージ等の諸機能を介して聴衆の感情を喚起する作用を発揮する。詩の持つ韻とリズムは繰り返されることにより、漸次心地良さを生み出すとともに、記憶に資する。ハマザーニー第16話「盲人のマカーマ」では、みすばらしい老人が杖で地面を

トントンとリズムカルに叩いて聴衆の注意を引き付ける。また詩文（詩語）の持つイメージ喚起力も聴衆の反応を左右する。「愛（フubb、マハッバ）」、「熱望（シャウク、ハワー）」、「畏れ（ハウバ）」、等々の一語で聴衆はイメージを掻き立てられ、ライラー、ダーウード（ダビデ）、サアド、等々の馴染み深い固有名詞を通して聴衆は様々な心象を生み出し、連想を馳せる。

説教の名手イブン・アル＝ジャウジーは説教の指南書である『クッサーの書』の中で演説中での詩の引用、朗誦の重要性を説き、特に演説の最終部で詩を朗誦することの重要性を説く〔Swartz-1971, 72-76〕。フトウバ（序文の祈願文）<sup>19</sup>、キッサ（預言者等の逸話）、ワアズ（説論）と漸次盛り上げられてきた説教は最後の詩の朗誦で頂点に達する。当代一の説教師（イブン・アル＝ジャウジー）はその効果を自らの演説で示し、自己の理論の正しさを立証する。それゆえ彼は説教最終部の詩（maqāfi', khawāfīm）のみを対象とした専著『終末詩の書（Kitāb al-khawāfīm）』を著している〔Hartmann-1986, 52〕。（彼は説教における詩の擁護者とハンバル派の学者としてカーッス批判者両様の立場でアンビヴァレントな立場に立った。〔Hartmann-1986〕）

説教における最終部の詩の重要性、詩の聴衆への訴求力は、本稿冒頭で紹介したイブン・アル＝ジャウジーの説教を聞いた旅人、イブン・ジュバイルの驚嘆するところであった。

説教師は「恋の火に溶けた我が心はいずこに…」に始まる詩を朗唱し始め、「いつまでもこの詩を繰り返し、気を高ぶらせた。彼は流れる涙のためおもわず言葉につまる程であり、詩句が出ないのかと心配するほどであった。そして彼は素早く立ち上がると、朦朧としながらもミンバルから足早に降りた。彼は人々の心に恐怖を吹き込み、彼らを燃え盛る炭の上に座らせたので、みんなは涙で目を赤く泣き腫らしながら彼とともに歩き、中にはあたりを憚ることなく泣いている者もおればまた、土埃にまみれてころがり回っている人もいた。何たる恐ろしい光景であろうか」。〔藤本・池田監訳、302～303〕。〔Hartmann-1986, 78, 89; Swartz-1999, 46〕

説教の影響力<sup>20</sup>、詩の力をまざまざと見せる場面である。聴衆の興奮は詩の引用で掻き立てられている。この説教中に詩を引用する慣習は現代にまで及び、詩人としても高名なサウジアラビアの説教師をモランは紹介している〔Molan, p.vi-vii〕。

イブン・ジュバイルは聖都メディナで、シャーフィイー派の長、サドル・アッディーン・アル＝イスバハーニーの説教集会に参加した際、「彼は魔術のような説得力がある独創的な説得力を始めた…彼は素晴らしい詩をつくり、それを彼の説教の中に入れた。彼が預言者の名を唱えるごとにラウダを指差し、繰り返し述べた詩である。『これは微風を醸し出すかれのラウダなり／彼のために祈り、御挨拶申しあげよ…』。興奮した異国者は、悔悟の言葉を言い立て、彼の前に前髪を投げだした」と熱狂ぶりを報告している。〔藤本・池田監訳、272～273〕

荘重で真摯、真面目で聖なる説教と詩、特に恋愛詩、という一見相容れない要素の結合こそ、アラブ・イスラーム文化、社会の特質である。アラブ詩はジャーヒリーヤ期より、勇氣と寛大さを基調とする砂漠の民のエトスを詠いあげ、悲恋を描いて人生の儚さを覚らせ涙を誘っていた。それゆえ詩人の地位は高く、部族長に匹敵すると見なされていた。またイスラーム勃興後、神との合一を願うスーフィー達も、神への尊崇、憧憬を恋愛詩の体裁で表現するようになっていた。それゆえスーフィーの理論家であるイブン・アラビー（1231年没）は、アラブ神秘詩の



代表とされる詩集『熱望の翻訳者 (Turjmān al-ashwāq)』を著したが、スーフィーの大家(シャイフ)に相応しからずと、ウラマーから批判を受けた程に、宗教と恋愛詩は密接に関連していた<sup>21</sup>。神を愛の対象として熱心に詩を詠んだのは、名高い女性スーフィーのラービア・アダウイーヤ(801年?没)を嚆矢とし、以後連綿とイスラーム神秘詩の歴史は続き、広く民間に広まっていく[Lings, 59-64]。ゆえに説教で恋愛詩が援用されても不思議ではない。否、恋愛詩こそ人生の真実を知らせ、神への信頼、憧憬を催させる最も効果的な手段である。

他方、アラブ文学に新生面を開いたハマザーニーの斬新性は、構成、文体、内容に及ぶ。フィクションな作品への忌避感が溢れる中、ハマザーニーは冒頭でハディースに倣うイスナードを置き、架空の人物の語り物という体裁を通してこの忌避感を打破した。さらにアラブ散文文学の代表たるアダブ物が詩や短い逸話の集成であるのに対して、『マカーマート』は一人の主人公の詐欺的犯行の記述という一貫性、現実感(リアリティー)、ドラマ性を生み出すことに成功している[Drory, 58-59]。そして文体面では韻文と散文の混交という新形式を作り挙げた。

「マカーマート」の散文はサジュウ(押韻散文)と称されるが、この訳語(押韻散文、rhymed prose)は誤解を招く。「マカーマート」を一読すれば直ぐに理解できるであろうが、その文体は単に押韻するのみならず、2語3語と同音や近似音する語を並列していくリズムカルで華麗な文体であり、ヘブライ語聖書(旧約聖書)で多用される並行体(parallelism)<sup>22</sup>に匹敵する。

そして構成面では博識と雄弁な人物が弁舌さわやかに素朴な庶民を騙す、この人物の流麗な詞章が魅力となっている。男は犯行時と正体が暴露された時に詩形式で弁明し、さらに終末部の捨て台詞も詩で行う[Monroe, 21-23; Kilito, 48; Stewart, 147]。

このように、『マカーマート』と説教は詩を介して密接なつながりを有するが、『マカーマート』で描かれる説教(者)とイブン・アル=ジャウジーが『カーッスの書』で表す説教(者)は、どこに相違があるのだろうか。両ジャンルの説教内容は同一であっても、その表現法は異なる。つまり文学作品たる『マカーマート』中の説教は、アラビア語の表現技術の粋を尽くし、種々の修辞技法を駆使した華麗な表現となっている。引用される詩の量も、圧倒的に『マカーマート』の方が多い。つまり説教の文体を比較すれば、イブン・アル=ジャウジーより『マカーマート』中の(偽)説教師の方が、聴衆への訴求力、影響力は圧倒的に上回る。(偽)説教師はその弁論術を駆使して、易々と被害者(聴衆)から金品を掠め取る。その被害は裁判官、太守という高い身分の者にも及ぶ。(イブン・アル=ジャウジーは徒に文体に凝るのを諫めるが、そこに彼の理論と実際のアンビバレントさを指摘されている。Cf, Swartz-1999, 48-49)。

イブン・アル=ジャウジーの説く理想の説教者と『マカーマート』の(偽)説教師の最も顕著な差異は、説教の目的と説教者の資質である。イブン・アル=ジャウジーはその説教の指南書である『カーッスの書』の中で説教師の資質を列挙する。まず何よりコーラン、ハディースに関する広く深い理解、法学、神学、言語学、等々のイスラーム諸学の知識、が必須条件とされる[Ibn al-Jawzī, 194; Swartz-1986, 109-113; 塚田, 30; 村山, 22~25]。ウラマーたちはカーッスと称される民間の説教師を激しく非難したが、その主な内容はカーッス達がコーランを誤って解釈し、伝承経路(イスナード)の不確かなハディースを引用する点にあった。またイスラ-イーリーヤと称される旧約聖書中のエピソードの内容を歪め、荒唐無稽の話に代えて聴衆を



楽しませたからである。しかし一般大衆はウラマーたちが行う講義や説教より、圧倒的にカーッスの話を聞きたがった[Goldziher, II, 154-156; Pedersen-1953, 227-228; Ibn al-Jawzī, 179-184; Swartz-1971, 192-208]。

ついでイブン・アル＝ジャウジーは説教者に何より真率な信仰心、敬虔さを求める[Swartz-1986, 112-115]。『マカーマート』の(偽)説教者は無頼漢の変装した姿であり、その衣の下に大衆を侮り、信仰を軽んずる不敬な心を宿している。つまり、イブン・アル＝ジャウジーが説教師に要求する資質の中の人間性の面が『マカーマート』の主人公には著しく欠けている。おまけに説教の目的は口先の雄弁で人々を改悛させ、それに乗じて金品を巻き上げることにある。(ただし、既述のように、説教と言う微妙なテーマを扱うためか、説教のマカーマでは稼ぐ絶好の機会をわざと忌避し、静かに退場する逸話もある)。

このように『マカーマート』中の「説教のマカーマ」は、(偽)説教師のインパクトある説教と、それに呼応して感動を露わにする聴衆の実態を描いている。さらにこの(偽)説教師は飲酒癖のある人物で、裏表のある人間であることも明かされる。このように『マカーマート』の「説教のマカーマ」は説教と説教師の実態を余す所なく描く。その意味で、イブン・アル＝ジャウジーの指南書の内容(理論)を補い、説教の実際をよりよく知りうる資料の役割を果たす。いわば両書の説教師と偽説教師の記述は、説教の実態を知らせるコインの両面(理論と実際)の働きを成している。

しかしイブン・アル＝ジャウジーが説教師の学識、人格両面において資質に欠け、非難する説教師の中には、自己を権威付け、聴衆の敬意を受けるために、豪華な衣服を纏い、わざと重々しい態度の説教師もいる。また禁欲主義者に見せかけるように、薬草を塗ってわざと青白くやつれた顔つきにする者や、自在に涙を催せるように催涙剤を懐に忍ばせる偽説教師もいた[Swartz-1971, Goldziher, II, 152-154]。

このような横行する偽説教師と『マカーマート』の主人公(説教者)は対極にある。『マカーマート』の魅力は、みすぼらしく貧相な人物が、その外見に反して学識と雄弁を発揮する外見と内面の乖離にある。ゴルトツィーヤーの挙げる偽説教師(quack, charlatan)は外見は飾り立てるが、内面(学識)は空疎である。他方『マカーマート』の説教師は化粧や薬草に頼らずとも、聴衆を引き付け、自己の術中に陥らせ、聴衆を悔悟に導く。彼の武器は学識と雄弁にあり、イブン・アル＝ジャウジーの説く説教師たる資格を十全に満たす。

『マカーマート』中の(偽)説教師の武器は雄弁と博識であり、それゆえ彼が聴衆から巻き上げた布施は、その博識と雄弁に対する当然の報酬であり、何らの非難に当たらない。彼らが非難されるとすれば、説教の後で飲酒に耽るという世間を欺く人格面にある。それゆえハマザーニーの第49話「葡萄酒のマカーマ」で、泥酔したまま礼拝に参列した一行が集会者から打擲される場面は2重のアイロニーを醸し出す。参列者を扇動したイマーム本人が偽者であり、酒飲みであり、聴衆はその酒飲みの説教に酔い痴れる(感動する)ゆえに。

説教の参加者は陶醉(wajd)するが、この語はスーフィーの忘我状態(ファナー)に至る境地を表わし、歌舞音曲で興奮する(ṭarab)のと通底する。聴衆はコーランの朗誦に心奪われ、説教で感動し、挿入される詩で我を忘れる。

聴衆をこのような心理状態に陥れることこそ説教の目的であるが、問題は（偽）説教師の金目当てという目的である。（偽）説教師が説教者たる資格に欠けるのが、その説教が報酬目的である点だ。イスラームでは「意図（niyya）」を重視する。ある行為や祈願も行為の前に立てる「意図」が重要とされる。「すべての行いはニーヤによる。人は自分が意図した物をえる」とするハディースもある<sup>23</sup>。『マカーマート』の説教師たちはその金儲けという説教の意図が非難され、イブン・アル＝ジャウジーが挙げる真率、篤信という人格、信仰面での資格の欠如により、非難さるべき存在となる。『カーッスの書』の中で、イブン・アル＝ジャウジーは、説教師の資格において、学識に次いで「良き目的と真率な意図（huṣn al-qaṣad wa-ṣihhat al-niyya）」を挙げる〔Ibn al-Jawzī, 194; Swartz-1971, 231〕。

いみじくもハリリー第50話では、（偽）説教師は、「当初は騙し（khādi'）半分は彼らの前に立っていたのだ。ところが途中から彼らの反応をもらいに身に受け、従順な懺悔（khāshi'）に心から変わってしまったのだ」と述懐する〔Harīrī, 448-449; 堀内, iii, 384〕。（この意味的に欺瞞－懺悔と対立し、かつ khādi' と見事に同形同音で押韻する2語こそ「マカーマート」に通底するパラレリズムの極致である。同様の技法が「遺訓のマカーマ」中の karam と qaram において援用されていた）。『マカーマート』最終部において、主人公（偽説教師）はやっと自己の意図の不正さに気が付き改悛し、正道（sira itraq）に戻ろうとする。皮肉にもその端緒は騙そうとした聴衆の真摯で敬虔な信仰心であった。

そして説教に関する「マカーマート」の功績は、イブン・アル＝ジャウジーや他の説教集では描かれぬ聴衆の反応を生き生きと描いている点にある。先述のように、説教は説教師と聴衆の共同作業である。参列者はイマームの説教内容のみならず、先導者たる彼の行動に従い、倣おうとする。ハマザーニー第10話、第49話はこの事実を活写している。イマームがコーラン読誦や立礼、座礼、伏拝、等の儀礼を必要以上に時間をかけて引き延ばしても、参列者はそれに従う。あるいは祈願（ドゥアー）時には、手を脇下に置き、掌を上にし、頭を上にする動作をするが、イマームに扮した悪漢が村人にその姿勢を取らせているうちに逃走するというエピソード（第21話）にも生かされている。ここに説教者（イマーム）と参列者の相互性、共同体性が現れている<sup>24</sup>。『カーッスの書』でイブン・アル＝ジャウジーは「説教師は、教育し、改良し、手懐ける調教師（rā'id）と同じだ」と指摘する〔Ibn al-Jawzī, 194; Swartz-1971, 230〕。「マカーマート」の説教のテーマは、このような聴衆の生態を描いているところに特色があり、資料的価値を有する。

簡単に箠絡される大衆の姿は、また作者の理解する庶民の姿である。軽率、軽信、人間性の暴露。ふとした軽はずみでモスクに足を踏み入れ、飲酒が露見して打擲を受ける。あるいは死者を蘇生させるという不可能事を易々と信じ込み、また人違いだと否定しても欲望に負けて食い逃げの被害者となる。ハリリーが万学を習得したアディーブの理想像を描くのに対して、ハマザーニーは下層民の愚かさ、脆さを通して人間性の弱さ、本質を描き出す。

説教師の資格や生態を描くイブン・アル＝ジャウジーの理論書と、説教師のみならず聴衆の行動や反応を生き生きと描く「マカーマート」は、説教に関するコインの両面（理論と実際、説教師と聴衆）であり、両書を併読することで、イスラーム世界の説教の実態をより良く理解

できよう。そして「マカーマート」と説教は「詩」を介して結びつき、アラブ・イスラーム世界における詩やサジュウ（押韻散文体）の影響力の強さも理解できるであろう。さらに「説教」をテーマとするマカーマを比較することで、ハマザーニー、ハリーリー両書の異同も明らかになったであろう。

アラビア語転写法[ ‘ b t th j h kh d zdh r z s sh ṣ d ṭ ḏ ‘ gh f q k l m n h w y ‘ ]

[注記]

- 1 前髪を切り落とすのは、自己の悔悟を神に対して明らかにするためであり、古いセム系民族の風習の一つである。Cf, Goldziher, I, 224-227; Swartz-1983, 233. スミス、後編、184~192、参照。アラブ（砂漠の遊牧民）はジャーヒリーヤ期より、戦争捕虜をその前髪を切り落としてから解放する習わしであった。アラブにとって前髪は、我が国の丁髷、月代と同じく、身分や名誉を象徴するものであった。Cf, Swartz-1983, 233. また堀内は、元来「前髪」は馬の立て髪を指し、ここを掴んで馬を制御するゆえに、「対面、面子」の意味に転化したと記す。堀内 I、401 頁、注 37。
- 2 金曜礼拝時の説教 (khuṭbat al-jum‘a) において、ムハンマドの故事に倣い、説教師 (khaṭīb) はミンバルに登壇するのを慣例としており、khuṭba minbariyya (ミンバルでの説教)、や khaṭaba ‘alā al-minbar (ミンバルで説教した) 等々の表現がなされる。Cf, Jones, 15.
- 3 ハリリー第 7 話「バルカイードのマカーマ」は主人公アブー・ザイドが老妻と共謀して礼拝者に書付 (riqā‘) を配り、後に回収する姿が描かれている。
- 4 現代の説教師や吟遊詩人の生態を明らかにし、彼らの影響力を示す文化人類的研究がある。現代においても説教師や遊行の詩人、そして詩は、アラブに訴えかける力を失っていない。Cf, Molan; Reynolds.
- 5 金曜礼拝時における説教 (フトゥバ) は、フトゥバ (序文)、キッサ (逸話)、ワズ (説教・訓戒) から成るとイブン・アル＝ジャウジーは説く。序文は「神に讃えあれ (al-hamd li-llāh)」の賞賛句で始まり、コーランの引用句で終わらせると説かれている。Cf, Swartz-1999, 41-48.
- 6 アル＝ハマザーニー (本稿では定冠詞を省略して表記する) は、本名 Abū al-Faḍl Aḥmad ibn al-Husayn ibn Yahyā ibn Sa‘īd ibn Bishr al-Hamadhānī といい、イラン北部の町ハマザーンで生まれ、学識はもとより、記憶力、文才共に優れ、「時代の驚異 (Badī‘ al-zamān)」と綽名された。特に「書簡論文 (リサーラ)」で知られ、そこから『マカーマート』に取り入れられている作品もある。世に出る端緒は当代随一の碩学フワーリズミー (al-Khuwārizmī, 847 年? 没、数学者とは別) を公開討論会において打ち負かせた事件である。生涯の大半を旅で過ごし、2 度盗賊に襲われたことと、生きたまま埋葬された逸話で知られている。Cf, al-Qāḍī, 198-208.
- 7 イスラームにおける「説教」は預言者ムハンマドを先蹤とするが、彼は金曜日の礼拝時に 2 回に分けて立って説教したというハディースがあり、これが慣例となった。『サヒーフ ムスリム』、第 2 巻 34 頁～36 頁。
- 8 maqāmāt は maqām と maqāmat の共通の複数形とされ、前者 (maqām) は音楽用語の「旋回法」の意味で用いられ、スーフィーの「(修行) 階梯」の意味として用いられている。両語ともに「立つ所」「集会」の意味を有するが、両語の相違を、前者は「抽象的、集合的」、後者を「具象的、個別的」と解する見方もある。堀内、ハマザーニー訳 (3)、469 頁、参照。
- 9 モスクでの礼拝は先に来た者から前列に座し、次々と横に座っていく。最前列は重要人物、篤信者や年長者、次いで男性、若者、宦官、奴隸、最後列に女性の順に座る。女性は別室に隔離するか、男性

- 席との間に仕切りを設けて座る。『サヒーフ ムスリム』、305頁～308頁。Cf,
- 10 アル＝ハリリー（本稿では冠詞を省略して表記）は、本名 al-Qāsim ibn ‘Alī ibn Muhammad ibn ‘Uthmān al-Harīrī であり、「絹の、絹に関する」の意味の「ハリリー」から、本人、あるいは眷属が絹に関する仕事に携わっていただろう。イラク南部の学都として知られたバスラ生まれで、有名な文学者ジャーヒズや文法学者のシーバワイフと同郷。生涯を旅に過ごしたハマザーニーとは異なって、生地バスラを離れず、『マカーマート』では各所で愛郷心が示されている。『マカーマート』以外では、文法書の『貴人の語法における潜水夫の真珠（Durrat al-Ghawwāṣṣ fī Awhāmi al-Khawwāṣṣ）』で知られており、同書で開陳されているアラビア語学に対する広汎な知識は、『マカーマート』で縦横に活用されている。
  - 11 第28話「サマルカンド」のマカーマはハティープが登場し、目撃者の語り手が驚嘆する程見事な説教（フトッバ）を行う。しかしその素性を怪しんだ語り手が後を追けると、豪勢な邸に住み、大酒飲みの正体が明らかになるという、「マカーマート」に通底する表と裏の2面性が描かれている。しかし訳者が解説するようにこのマカーマの眼目は、説教の内容にあるのではなく、その説教の詞章にある。（偽）説教師は説教文をすべてアワーティル（無装飾）技法で構成するという驚嘆すべきアラビア語能力を発揮する。つまり作者の意図は説教内容ではなく、文体の彫琢にある。参照、堀内、ハリリー、第2巻、329頁。「マカーマート」の内容分類をすれば、「説教物」、サーサーンに代表される「詐欺・犯罪物」、「裁判物」、「説教物」、そして文学談義や謎かけをする「アダブ物」、等々に分けられる [Hāmeen-Anttila, 111]。本マカーマは「アダブ物」に分類されるゆえに、本稿の考察から除外する。また第30話「スールのマカーマ」は、編者イーサー・サーバーは目次 [p.459] で「ハティープ」と人物紹介しているが、内容は物乞い集団（サーサーン）の長が、仲間の婚礼式で新婦紹介する話であり、広く大衆を対象にした「説教」のテーマより外れるゆえに本稿の分析対象とはしない。但し、第28話、第30話はアラブ・イスラーム文化や社会の資料としては重要で、イスラーム世界の下層民の研究で知られるボスワースもこれらのマカーマに言及する。Bosworth, pp.98-102.
  - 12 ムスリム『サヒーフ』、1-56、夜の旅人のために、目安として宿営地前に焚く篝火は「もてなしの火（qira）」と呼ばれた。堀内-1-241、265、参照。ハマザーニーはこの慣行を援用して、度外れた歓待ぶりを発揮し、客人に音を上げさす皮肉な姿を描く。（第9話「ジュルジャンのマカーマ」、第22話「マディーラのマカーマ」）。
  - 13 サーサーン、あるいはバヌー・サーサーンと称される遊行集団を指す語であり、その出自は諸説あるが、彼ら自身はササン朝ベルシャとの関連を自称する。（Bosworth, 111；堀内、1-112、2-378）。第30話スールのマカーマはこの集団の婚礼風景を叙し、興味深い。アッバース朝のアブー・ドゥラフ（842年没）はこの集団の隠語を詠う詩集を編んでいる。Cf, Bosworth, 111-222.
  - 14 ブルームは序章（36頁～38頁）で自説の修正比率の概要を述べ、本文でその内容を詳述する。彼はクリナーメン、テステラ、ケノーシス、デモナイゼーション、アクケーシス、アポフラデースの6つの修正比率を提案するが、何れの問題もギリシャ哲学、新プラトン主義、聖書（聖パウロ）、古代神秘主義等から借用されている。本稿でハリリーに適応したクリナーメン（clinamen）の語は古代ローマの哲学詩人ルクレティウスから取られ、「誤読」、あるいは「正当な曲解」を意味し、後続者（ハリリー）が先行者（ハマザーニー）から「逸れて」、「新たなる出発」に歩みだす行為を指す。Orr, 68-69、小谷野・宮本訳、36頁、土田、90頁、参照。この時代を逆転させた影響関係は、「本歌取り」の長い伝統があるわが国では容易に理解できるであろう。本歌取りの名手、定家、により、本歌は新たな相貌を見せ、それ（本歌取り）を通して未来の新しい読みの可能性をも示す。
  - 15 ザマフシャリー作品はタイトル（fī al-mawā‘iz）が示すように説教・訓戒を内容として物語性は無く、登場人物もアブー・アル＝カーシム（ザマフシャリーのクンヤ）のみである。またイブン・アル＝ジャウジーやガザリーの作品は「マカーマート」と冠されているが、ザマフシャリーと同工であり、ハリリー流の「マカーマート」には入らない。Cf, Stewart, 154-155.
  - 16 リサーラ（risāla）は「書簡、信書」を表すが、アッバース朝以降、書記官僚（カーティブ）や文人

- (アディーブ)らにより、あるテーマに関する公開を前提とする「書簡論文」とでも称する文書が盛んに書かれるようになった。ハマザーニーは名文家として名を馳せ、リサーラの手本とされた。Cf, *EAL*, q.v. risāla (Anne-Marie)
- 17 文学(アダブ)の語は、英語の *literature* と同じく、広狭の2義を含む。狭義では創造力を元とする「文学」を指し、広義にはある言語で書かれた総体を指す。つまり、思想書や歴史作品、学術研究書をも包含する。アダブも同じく広狭の2義を有し、ここでは後者の広義の意味で用いる。近代以前(18世紀)のアダブの語に「文学」の訳語を充てるのは不当である。またイブン・アブド・ラッビヒラの短い逸話の「集成集」もアダブと呼ばれ、本稿では「アダブ物」の訳語を用いる。Cf, *EAL*, q.v. adab (Pellat).
  - 18 いわゆるイスラーム法とされるシャリーアは、コーランの文言、すなわち神の言葉を法源とする特殊性を持つ。シャリーアは来世をも含む人間の社会生活全般を規定するのみならず、個人の生き方をも統御し、個々の行為を義務、推奨、許容、忌避、禁止の5範疇から規定する。つまり、シャリーアは法(実定法)であると同時に道德、倫理規範である。『岩波イスラーム辞典』『法学』(小杉泰)、参照。「訓戒(ワアズ)なしの説教はシャリーアなしのイスラームと同じくあり得ない」というイブン・アル＝ジャウジーの言葉が残されている、Cf, Swartz-1999, 44. そしてコーランの文言を誤りなく理解するために発展してきたイスラーム諸学は法学(フィクフ)と文法学を中心とし、神学(カラム)は外来の学問と見なされ低い位置に留まり、形而上学、論理学、数学、医学等々は理性的学問とされた。
  - 19 この「フトゥバ」はこの語の原意である「話、会話」を意味し、この語の特殊限定的な意味である「説教」を指さないことに注意すべきである。
  - 20 この記述はまた説教の場におけるイマーム(先導者)の影響力の大きさをも示す。一般的にイマームが説教者(ハティーブ)を務める場合が多いが、ハマザーニーの第7話や第21話で示されていたように、イマームは説教の内容のみならず、その長さや、祈願(ドゥアー)の動作をも先導する。この慣習がハマザーニーの「モースルのマカーマ」で描かれており、死者を生き返らせる企みに失敗した主人公と共犯者の語り手は、最後の祈願と称して村人を祈願させ、伏拝させた状態にして遁走するトリックに使う。本注25、参照。
  - 21 イブン・アル＝ジャウジーは『熱愛非難(Dhamm al-hawā)』という有名な書を著しているが、その書名から(神)愛非難の書と誤解されているが、その内容は『カーッスの書』と同じく「フッブ、マハッバ(神愛)」に関する賛否両論を客観的に紹介した理論書である。
  - 22 通説に反して Beeston はサジュウ(押韻散文)の特質はパラレリズムにあると主張し、次いで Drory が「マカーマート」を題材にしてアラビア語散文の文体分析を行った。Drory, 114-121. 「パラ」「サジュウ」*EAL*
  - 23 (ニーヤ) 一般に意図や意志を表わす語であるが、特に信仰行為における意図やその表明を表わす。信仰(行為)における真率はニーヤが保証する。それゆえ見せかけの行為、善行は厳しく非難され、「禍いあれ、礼拝しながらも、礼拝に身がはいらず、上辺をつくろい、慈善を断る者に」(コーラン107章4節～7節)との文言がある。礼拝や清めを行う前にはニーヤの表明が要求される。『岩波イスラーム辞典』、「ニーヤ」(小杉)、「浄め」(中田考)、参照。
  - 24 Jones, 232, 234, ハディースでは、「アザーンを聞いた者は復唱すべきこと」(『サヒーフ』264頁)、「礼拝の動作」(同268～269頁)、「イマームの作法に厳格に従うこと」(同287～303頁)と示されている。

[参考文献]

- Allen, Roger, *The Arabic Literary Heritage – The Development of its Genres and Criticism*, Cambridge, Cambridge University Press, Cambridge, 1998.
- Armstrong, Lyall, *The Quṣṣāṣ of Early Islam*, Leiden, Brill, 2017.



- ‘Athamina, Khalil, “Al-Qaṣaṣ: Its emergence, religious origin and its socio-political impact on early muslim society,” *Studia Islamica*, 76 (1992).
- Behmardi, Vahid, “Rhetorical Values in Buyid Persia according to Badī‘ al-Zamān al-Hamadhānī,” in L. Behzadi and V. Behmardi (eds.).
- Behzadi, Lale and V. Behmardi (eds.), *The Weaving of Words – Approach to Classical Arabic Prose*, Beirut, Ergon, 2009.
- Berkey, Jonathan P., “Storytelling, Preaching and Power in Mamluk Cairo,” *Mamlūk Studies Review*, 4 (2000).  
\_\_\_\_\_, *Popular Preaching and Religious Authority in the Medieval Islamic Near East*, Seattle and London, University of Washington Press, 2001.
- Bloom, Harold, *Anxiety of Influence*. (小谷野・宮本訳『影響の不安——詩の理論のために』、新曜社、2004年)。
- Bosworth, Clifford Edmund, *The Mediaeval Islamic Underworld – The Banū Sāsān in Arabic Society and Literature*, Leiden, E. J. Brill, 1976.
- Brockopp, Jonathan E., *Muhammad’s Heirs – The Rise of Muslim Scholarly Communities, 622–950*, Cambridge, Cambridge University Press 2017.
- Drory, Lina, *Models and Contacts – Arabic Literature and its Impact on Medieval Jewish Culture*, Leiden, Brill, 2000.
- Gaffney, Patrick D., *The Prophet Pulpit – Islamic Preaching in Contemporary Egypt, al-Kutub al-Berkley*, University of California Press, 1994.
- Chamberlain, Michael, *Knowledge and Social Practice in Medieval Damascus, 1190–1350*, Cambridge, Cambridge University Press, 1994.
- Goldziher, Ignace, *Muslim Studies*, ed. & tr. by S. M. Stern, London, George Allen and Unwin, 1971.
- Halladén, Philip, “What is Arab Islamic Rhetoric? Rethinking the History of Muslim Oratory Art and Homiletics,” *International Journal of Middle East Studies*, 37 (2005).
- al-Hamadhānī, Badī‘ al-Zamān, *Maqāmāt*, ed. Muhammad ‘Abduh, Bayrūt, Dār al-Kutub al-‘ilmiyya, 2002 (2<sup>nd</sup>. ed.); *Sharḥ Maqāmāt Badī‘ al-Zamān al-Hamadhānī*, ed. ‘Abd al-Hamīd, Bayrūt, Dār al-Kutub al-‘ilmiyya, nd.
- Hāmeen-Anttila, Jaakko, *Maqama – A History of a Genre*, Wiesbaden, Harrassowitz, 2002.
- al-Harīrī, Abū Muḥammad al-Qāsim, *Maqāmāt*, ed. Isā Sābā, al-Qāhira, Dār Ṣādir, nd.
- Hartmann, Angelika, “Les ambivalences d’un sermonnaire hanbalite. Ibn al-Ġawzī, sa carrier et son ouvrage autographe, le *Kitāb al-Hawātīm*,” *Annales Islamologiques*, tome, XX□ (1986).  
\_\_\_\_\_, “Islamisches Predigtwesen im Mittelalter: Ibn al-Ġawzī und sein *Buch der Schlußreden*,” *Saeculum*, 38 (1987).
- Homerin, Th. Emil, “The Forgotten Preaching Poetry,” *Arabica*, 25 (1986).  
\_\_\_\_\_, “Preaching Poetry: The Forgotten Verse of Ibn al-Šahrazūrī,” *Arabica*, 38 (1991).
- Ibn ‘Abd Rabbihi, *al-‘Iqd al-farīd*, ed. Muhammad Qamīha, Bayrūt, Dār al-Kutub al-‘Ilmiyya, nd.
- Ibn Ishāq, *Sīra al-nabawīya li-Ibn Hishām; The Life of Muhammad – A Translation of Ibn Ishaq’s Sirat Rasul Allah*, tr. A. Guillaume, London, Oxford University Press, 1970, 3<sup>rd</sup>. ed. (後藤明・医王秀行・高田康一・高野大輔・共訳『預言者ムハンマド伝』、岩波書店、2011年)。
- Ibn al-Jawzī, *Kitāb al-quṣṣaṣ wa al-mudhakkirīn*, ed. Qāsim al-Sāmarrā’ī, al-Riyād, Dār ‘Umayya, 1983.
- Ibn Jubayr, *Rihra, The Travels of Ibn Jubayr*, ed., William Wright, rev. by M. J. de Goeje, Leiden, 1907. (Gibb Memorial Series V). (藤本・池田監訳『イブン・ジュバイルの旅行記』、講談社学術文庫、2009年；矢島彦一訳注『メッカ巡礼記——旅の出会いに関する情報の備忘録』、平凡社、2016年)。
- Jabre, Jamil, *Gāhiz – et la société Baghdad*, Beirut, Dar Sader, 2004.
- al-Jāhiz, *Al-Bayān wa-al-tabyīn*, ed. M. Hārūn, Cairo, Maktaba al-Khānjī, nd.  
\_\_\_\_\_, *al-Bukhala*, ed. Ahmad ‘Awamil and ‘Ali al-Jarim, Bayrut, Dar al-Kutub al-‘Ilmiyya, 1988; tr. R. B. Serjeant, *The Book of Misers*, reviewed by Ezzeddin Ibrahim, The Center for Muslim Contribution to

- Civilization, Gaenet Publishing, Doha, Qatar, 2000.
- Jones, Linda G., *The Power of Oratory in the Medieval Muslim World*, Cambridge, Cambridge University Press, 2012.
- Kilito, Abdelfattah, *Les Séances – Récits et codes culturels chez Hamadhani et Hariri*, Sindbad, 1983.
- Lings, Martin, *Sufi Poetry – A Mediaeval Anthology*, London, The Islamic Texts Society, 1970.
- Makdisi, George, D. Sourdel (eds.), *Prédication et propagande au Moyen Âge, Islam, Byzance, Occident*, Patis, 1983.
- Molan, Peter D., *Arabic Religious Rhetoric – The Radical Saudi Sheikhs, A Reader* Kensington, USA, dp Dunwoody Press, 1997.
- Muslim, Abū al-Husain, *Ṣaḥīḥ*. (磯崎・飯森・小笠原共訳『日訳 サヒーフ ムスリム』、日本ムスリム協会、1987年)。
- Okazaki, Keiji, “*Maqāma* as a Courtroom Play – disguised hero, duped judge,” *Orient*, 42 (2007).
- Orfali, Bilal, “The Art of *Muqaddima* in the Works of Abū Manṣūr al-Tha‘ālibī,” eds., Lale Behzadi and Vahid Behmadi, *The Weaving of Words – Approaches to Classical Arabic Prose*, Beirut, Ergon, 2009.
- Orr, Mary, *Intertextuality – Debate and Contexts*, Cambridge, UK, Polity, 1988.
- Pedersen, Johs, “The Islamic Preacher; wā‘iz, mudhakkir, qāṣṣ,” in *Ignace Goldziher Memorial Volumes*. Vol. □, Budapest, 1948.
- \_\_\_\_\_, “The criticism of the Islamic Preacher,” *Die Welt des Islams*, 2 (1955).
- Pellat, Ch., *Le milieu baṣrien et Ḡāhiz*, Adrien-Maisonneuve, 1953.
- Prendergast, W. J. (tr.), *Maqāmāt of Badī‘ al-Zamān al-Hamadhānī, translated from Arabic with an introduction and notes, historical and grammatical*, forwarded by C. E. Bosworth, London, Curzon, 1973 (1<sup>st</sup> impression, 1973).
- Al-Qādī, Wadād, “Badī‘ al-Zamān al-Hamadhānī and his Social and Political Vision,” in M. Mir and J. E. Fossum (eds.), *Arabic and Islamic Studies in Honor of J. A. Bellamy*, Boston, Darwin Press, 1993.
- Reynolds, Dwight Fletcher, *Heroic Poets, Poetic Heroes – The Ethnography of Performance in an Arabic Oral Epic Tradition*, Ithaca, Cornell University Press, 1995.
- Rotter, Gernot (tr.), *Al-Hamadhānī – Vernunft ist nichts als Narretei*, Die Maqāmen, Regensburg, Erdmann, 2004.
- Shmookler, Max Robert, *The Levantine Maqāmāt before the Nahḍa and beyond the Novel* (Ph. D. Dissertation, The Graduate School of Arts and Sciences at Columbia University), 2020.
- Shosan, Boaz, *Popular Culture in Medieval Cairo*, Cambridge, Cambridge University Press, 1993.
- Smith, Robertson, W., *Lectures on the Religion of the Semites*, London, Adam and Charles Black, 1894. (永橋卓介訳『セム族の宗教』、岩波書店、1943年)。
- Stewart, Devin, “The *Maqāma*,” in R. Allen and D. S. Richards (eds.) *Arabic Literature in the Post-Classical Period*, Cambridge, Cambridge University Press, 2006.
- Swartz, Merlin (ed. and tr.), *Ibn al-Jawzī’s Kitāb al-quṣṣāṣ wa-al-mudhakkirīn*, Beirut, Dar al-Mashriq, 1971.
- \_\_\_\_\_, “The Rules of the Popular Preaching in Twelfth-Century Baghdad, According to Ibn al-Jawzī,” in G. Makdisi & D. Sourdel (eds.), *Prédication et propagande au Moyen age, Islam, Byzance, Occident*, Presses universitaires de France, 1983.
- \_\_\_\_\_, “Arabic rhetoric and the art of the homily in medieval Islam,” in R. G. Hovannisian and G. Sabagh (eds.), *Religion and Culture in Medieval Islam*, Cambridge, Cambridge University Press, 1999.
- Young, Douglas C., *Rogues and Genres – Generic Transformation in the Spanish Picaresque and Arabic Maqāma*, Delaware, Juan de la Cuesta, 2004.
- Zakharia, Katia, *Abū Zayd al-Sarūgī, imposteur et mystique*, Damas, Institut Francais Etudes Arabes de Damas, Damascus, 2000.
- Al-Zamakhsharī, Abū al-Qāsim, *al-Maqāmāt (fī al-mawā‘iz)*, ed. Yūsuf Baqā‘ī, Bayrūt, Dār al-Kitāb al-Lubnānī, nd.
- 岡崎桂二「アダブの罫——『マカーマート』のエクリチュール」、『四天王寺国際仏教大学紀要』、34（2002年）。

- 同「『マカーマートの演劇性——メタモルフォシス・カタルシス・ダイクシス』、『四天王寺国際仏教大学紀要』、39（2005年）。（2005-a）
- 同「ジャンルの生成と変容——『間テキスト性』から見たる『マカーマート』」、『四天王寺国際仏教大学紀要』、40（2005年）。（2005-b）
- 同『マカーマート』における医療のトポス——蘇生術、産婆術、預言者の医術』、『四天王寺大学紀要』、47（2009年）。
- 同「アラブ文学における論争ジャンル——『マカーマート』の周縁」、『四天王寺大学紀要』、48（2009年）。
- 杉田英明「天路歷程譚の系譜——イスラーム世界とダンテ」、蓮實・山内（編）『地中海終末論の誘惑』、東京大学出版会、1996年。
- 土田知則『間テキスト性の戦略』、夏目書房、2000年。
- 塚田絵里奈、「後期マムルーク朝社会におけるワーイズの実像——人気説教師クドゥスィーの場合」、『西南アジア研究』、71（2009）。
- 波戸愛美「『マカーマート』に見られる奴隷像」、『お茶の水史学』、62（2009）。
- 堀内勝（訳）『マカーマート——中世アラブの語り物』、平凡社、3巻、2008年～2009年。（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、と略記）
- 同（訳）「アル・ハマザーニー著『マカーマート』」、『イスラーム世界研究』、5巻（2012年）、6巻（2013年）、7巻（2014年）。
- 村山さえ子「アッバース朝後期バグダードにおけるワアズー都市における権力者・知識人・民衆の接点としての説教」、『お茶の水史学』、62（2009）。
- 八木久美子『グローバル化とイスラーム——エジプトの「俗人」説教師たち』、世界思想社、2011年。